

心の ともしび



暗いと不平を言うよりも
すすんであかりをつけましょう



古いペン軸

作家 遠藤周作

長い間、一つのペン軸を使っています。万年筆という奴が嫌いだからです。もつともこのペン軸はどこでも買える品物で、形もぶざまな上に小説を考えながら私がその先をガリガリと噛むため、小さな傷が外側について、人前でそれを出すのが一寸恥しいくらいでした。

この間、ある旅館で仕事をしていました。部屋のむこうに沼が抜つている。小説はなかなか捗らない。だんだんと気がいらいらしてきました。

恥しい話ですが、その時、私は自分のペン軸のみにくさが急に気にかかってきました。小説が捗らぬのもこんな古いペン軸を使っているせいだと思ひ窓をあけて沼の中に投げ棄てました。ポンという隣れな音をたててペン軸は消えてしまいました。だが新しいペン軸を買ってみるとどうでしょう。小説もさつきよりうまく行かないような気がする。別にペンが悪いのではないのだが、持ち具合といい、紙の上をペンが走る感じといい、前のもののほうが私にはピッタリだという気がする。幾日たってもそ

の感じはなくならない。私は始めて、あの形もぶざまで、人前に出すのが恥しかった古いペンが自分にとってどんなに貴重だったかを知りました。

失つてみてその物の価値を知るといふ諺ことわざがありますが、その時、私は考えました。このことは人間と人間との関係にもいえるのじゃないかと。たとえば夫婦がそうです。平生へいぜいはそんなに感じもしない女房の有難さが、彼女を失つてみてわかるという人が多くあります。

私のペンはきたなくぶざまだった。しかし今はあれほど価値のあるものはないような気さえする。人間の場合だって同じだ。きれいなもの、魅力のあるものを愛するぐらいは誰でも出来る。しかしきたなく、ぶざまになったものを棄てないことは、むずかしいことです。本当の愛とはきれいなものに心ひかれるということではなく、自分の選んだ人や、ものごどんなにみにくくなっても、それをいつまでも棄てないことではないかと思ひます。



ホームページ (<https://www.tomoshibi.or.jp>)



【心のともしび 遠藤周作特別号】

「海と毒薬」「沈黙」「深い河」を始め多くの著作を遺したキリスト教作家遠藤周作氏は、今年生誕100年を迎えます。遠藤氏には、1960年代から心のともしび運動のラジオ番組への寄稿・テレビ出演、そして編成委員として、長年にわたりご尽力いただきました。遠藤氏の誕生日3月27日に因み、3月号を「遠藤周作特別号」として、当時書かれた原稿を原文のまま掲載、また、遠藤氏が「心のともしび」に関わるきっかけとなった出来事をご紹介します。

〒604-8006 京都市中京区河原町三条上ル 電話075-211-9341 心のともしび運動YBU本部